

花 き

実 況

1 キ ク

あわらの暮れ植え栽培の「小鈴」の草丈が 83cm、葉数 58 枚で生育が早い。春植えの「小鈴」は 23cm、23 枚、「小雨」が 37cm、34 枚で、かなり茎が細い。全体的に 7 月～8 月咲ギクも灌水不足で草丈が低い。

6 月 1 日には、10 月咲きコギクの定植が行われ、14 日に摘心が行われた。8～9 月咲きギクのすぐりが行われた。

病害虫ではカスミカメムシ類、アザミウマ類、アブラムシ類、白さび病がみられる。白さび病はサプロール系の治療薬の感受性が低下している。

奥越では、6 月 20 日に J A テラル越前キク部会が目そろえ会、6 月 18 日に越の花生産組合の作見が行われた。出荷は 6 月 15 日のキク部会出荷で 250 箱、6 月 20 日で 400 箱前後(写真 1、2)、価格は赤系コギクが安い。出荷された切り花は例年より病害虫による傷みが多い。芽立ち自体は総じてよく、4 月中下旬の高温により全体的な生育はここ数年間で最も早い。「せいざ」、「つるぎ」等は 5 月 25 日頃から開花がみられ、「せいざ」草丈 70cm、葉数 49 枚、「つるぎ」78.2cm、葉数 41 枚であった。「あかね」は 3 月下旬よりエスレル処理が 2 回行われ、6 月上旬開花で、昨年よりやや遅い。

盆ギクは「シューペガサス」で 41cm、23 枚、「小鈴」43cm、28 枚と生育は良い(6 月 15 日調査)。病害虫の発生は 6 月上旬にシロシタヨトウが発生し、中旬にオオタバコガ 2 令幼虫が発生したが、個体数は少ない。その他の害虫として、キクキンウババ、キクスイカミキリ、斑点細菌病(写真 3)が少発生であった。白さび病、黒さび病は 2 か所の圃場で見られ、クロゲハナアザミウマをはじめとして多くの病害虫が見られるため、選花が強化されている。

福井市東郷地区の春植え 8 月咲きギクは、6 月 16 日調査(昨年度 9 日調査)で、「小鈴」29cm(38cm)、「小雨」41cm(52cm)、「恋心」43cm と、定植が 4 月 22～25 日に行ったことで、やや生育が遅い傾向があった。また、エスレル処理を 2～3 回行っている。

病害虫は、アブラムシ類、アザミウマ類、カルシウム欠乏が少発生であった。

福井市南部はエスレル処理が行われておらず、定植が 4 月 17 日と慣行に近い時期であった。「小紫」51cm、蕾径 2mm、「小雨」69cm、蕾径 3mm、「小鈴」51cm、「恋心」65cm、蕾径 2mm と 14 日程度早かった。病害虫ではオオタバコガの食害がみられた。

永平寺では 4 月 20 日に定植された「小鈴」の草丈は 26～41cm と生育にばらつきがみられた。「はじめ」が 46cm(昨年 42cm)、蕾径 5mm、「夕霧」が 41cm(37cm)、2mm と開花が 2 週間程度早い。病害虫は白さび病がみられたが、現在は冬孢子堆は減少している。

丹生では 4 月 7～14 日定植もので、6 月 17 日調査で、春植え 8 月咲きで「やよい」45cm、「秀水」43cm(55cm)、「小鈴」41cm(前年 55cm)等で、多くの品種にカスミカメ類の食害が



写真 1 6 月中旬の出荷状況



写真 2 6 月中旬の選花状況



写真 3 斑点細菌病

みられた。「花風」、「恋心」、「やよい」、「小雨」等が出蕾もしくは間近であり、7月中旬開花が予想され、例年より7～10日早い。

越前市は6月17日調査(昨年5日調査)で、「はじめ」55cm(45cm)、「松風」50cm、蕾径3mmで、一部の品種にはエスレル処理がなされている。病害虫は、一部の品種にカスミカメ類の被害がみられる。

二州の暮れ植えギクは「小雨」102.2cm、「みのる」89.8cmで両品種とも開花ははじめである。春植え8月咲き小ギクの草丈は6月15日調査(昨年6月16日調査)で「水鳥」39.2cm(37.8cm)、「翁丸」41.8cm(36.0cm)、「やよい」42.0cm(34.4cm)と昨年より生育が早く、開花も早い見込みである。9月咲きギクの「わかさ」は12.8cm、「映紅」8.2cmと生育が良い。病害虫ではアザミウマ類、キクモンサビダニが少発生である。

若狭の秋植え夏小ギクは、6月16日調査(昨年6月16日調査)の「はじめ」が草丈102.4cm、立弁(昨年117.8cm、立弁)、「とび丸」が草丈75.8cm、立弁(昨年108cm、立弁)となっている。「はなふさ」の草丈が116.8cm、蕾径7.7mm(109.4cm、7.3mm)と一部の品種で草丈が短いものの、ほぼ昨年並みの生育である。春植え盆ギクは4月13日定植もので、「翁丸」が51.2cm(昨年40.6cm)、「くれない」が44.6cm(昨年40.0cm)、「しらかば」が42cm(41.2cm)と昨年よりやや生育が早く、「仁星」、「ひまわり」で出蕾した。9月咲きギクは、5月20日より定植され、「南月」21cm(6.4cm)、「大信」18.2cm(8.2cm)、「おりがみ」29.0cm(6.6cm)と昨年より生育が早い。病害虫ではアザミウマ類、アブラムシ類の被害がわずかにみられる。一部の圃場でマメコガネの食害があった。

2 ユ リ

奥越のシンテッポウユリは、「F₁オーガスタ」の4月定植実生苗が、6月16日調査(昨年は8日調査)の露地栽培で葉数7～9枚(12枚)、葉長17cmで一部の株は抽台をしている。中芯球は草丈34cm、葉数67cmで7月下旬開花見込である。

福井ユリの生産者は福井市、永平寺町、坂井市、あわら市、鯖江市で10名が栽培しており、4月26日から6月8日まで出荷が続いた。昨年から5月上旬の母の日に向けて開花時期を早めた作型を導入する生産者が増えている。今年は約1万本の出荷であった。

春江のユリは6月10日調査で、「カサブランカ」103cm、葉数112枚、「アルプフェラ」96cm、一部の株にアザミウマ類、球根腐敗病が発生した。暑かったため一部の株は生育が不良であった。

あわら市の福井ユリ「リリブライトレッド」は6月15日で出荷終了した。1～2輪花が多く、一部に葉枯病が見られた。シンテッポウユリは葉数8～12枚程度で、葉色は良い。

3月30日定植のカサブランカは93cm、43枚で6月下旬開花予定である。

福井市の「リリブライトレッド」は6月9日調査では草丈110(110)cmで収穫終了である(昨年6月11日調査)。鯖江市の据置露地栽培の「リリブライトレッド」は6月12日調査では草丈100cmで5月25日から出荷が始まり、6月11日まで出荷された。生育のバラツキが見られた(昨年6月11日調査)。

3 スイセン

6月10日、越前町すいせん部会総会が開催された。福井市竹生地区のスイセン球根堀上は6月15日に行われた。養成球根の掘り上げは5月下旬から始まり6月上旬から本格的になった。促成栽培の共同高温処理は6月20日から開始された。

4 トルコギキョウ

坂井の抑制栽培の2度切り栽培の「レイナシリーズ」の草丈は70～90cm(6月21日調査)

で、出荷最盛期を迎えている。8月の抑制栽培予定圃場では太陽熱消毒を行っている。一部にハスモンヨトウ、灰色かび病、炭そ病が少発生している。

大野市では、ロジーナシリーズ 5～7 対葉、草丈 22cm となっている（本年は 6 月 21 日調査）。

南越では 6 月 17 日調査（昨年度は 6 月 5 日）で、「ボヤージュグリーン」二度切り栽培で 85cm、収穫間近である。11 月中下旬（13～20 日）に定植された「ボヤージュグリーン」が草丈 102cm、「リネーションシリーズ」109cm、「フルフル」が 90cm と昨年より生育が良い。



写真4 トルコギキョウの
ハスモンヨトウ被害株

2 月初旬播種、4 月 20～25 日に定植された「オーブカクテル」38cm、「ボヤージュグリーン」28.5cm、「モレットマリン」28cm で対葉数 11～12 枚であるが、カルシウム欠乏が若干みられ、初期の活着不良がおきている。

二州では、6 月 15 日調査（昨年 6 月 16 日調査）された「アンジュラベンダー」が草丈 38.4cm、「プラチナキング」49.4cm、「あすかの吹雪」67.6cm、6 月中旬開花とほぼ昨年並みの開花である。4 月 16、17 日に定植された「ブルーシルエット」の草丈 28.6cm、「ピンクシルエット」31cm で、ともに葉数は 7～8 対葉である。

若狭では、10 月中旬定植の「ピンクシルエット」が草丈 94cm、「あすかのそよ風」が 85.8cm でともに開花はじめである。1 月定植の「ココ」47.4cm、「キキ」59cm、「ララ」72.2cm で、下位節から側枝発生が多い。5 月定植ものは草丈 15～20cm、葉数 7～8 対で、例年より生育が早い。

表1 あわら市のトルコギキョウ生育(6 月 10 日調査)

品種名	草丈(cm)	葉数
ボレロマリン	88	18
サルサマリン	96	21
ロベラピンク	84	18
冬のマリア	82	18
ボンボヤージュG	80	15

5 その他

あわら市のヒマワリは出荷終了である。アスター「ステラシリーズ」、「松本シリーズ」は 5 月定植で草丈 10～15cm である。福井のヒマワリは 6 月 9 日調査で 4 月 26 日播種の作型が 56（55）cm で生育良好である（昨年 6 月 11 日調査）。

永平寺の 5 月下旬に播種されたヒマワリ「サンリッチオレンジ 50」は 6 月 16 日調査で、草丈 30cm とやや草丈が低い。上位葉にグンバイムシ類による被害が見られた。

対 策

1 梅雨期の圃場排水の徹底

梅雨期の長雨が続くと、根の障害が発生する。そこで、畝の再整備を実施し、冠水しやすい圃場で栽培している場合は、畝溝とこれに交わる集水溝、排水路の溝さらえや清掃、除草を十分に行う。

逆に、乾燥気味の気候が続いている場合、畝間灌水を行う。下葉の 1/3 が朝方から萎れている状態であると、畝間灌水を行う必要がある。夜温が高いときは畝間灌水はなるべく行わない。

実施前に溝さらえ、通路の清掃、土寄せ等を行い、スムーズに水が流れるようにする。畝間灌水は、圃場が湿田で排水が悪い場合は、走らす程度、そうでない場合は通常の灌水を基準とするが、夕刻～早朝までとし、明朝の 10 時には完全に水が落ちているようにする。

2 梅雨期の病虫害防除の徹底

1) キク黒さび病

梅雨期の湿潤な季節に多発する。白さび病と異なり、比較的高温でも発生が続くため断続的に発生が続く。日当たり、風通し、排水をよくする。病葉は見つけ次第摘除する。治療剤としてはマネージ乳剤しか登録されていないため、白さび病の予防を兼ねて有機硫黄系剤（兼商ステンレス、ジマンダイセンフロアブル、エムダイファー水和剤）の散布を励行する。兼商ステンレスは特に高温時の薬害に注意する。



写真5 褐斑病被害株

2) キク黒斑病・褐斑病

発生は、降雨との関係が強く、摘心後に降雨が多い場合には早くなる。高温多湿の条件で感染が拡がり、降雨等による土壌の跳ね上がりも下葉への感染が助長されるため、例年被害が多い品種は、梅雨前に下葉かきを行う。病葉は、二次感染を防ぐために、見つけ次第摘葉し、圃場外で処分する。生育初期にダコニール1000、ストロビーフロアブルやベンレート水和剤の散布を行う（表2）。有機銅系のサンヨールも褐斑病に登録があるが、使用は出蕾までとし、薬害に注意して用いる。

表2 登録のある薬剤例

殺菌剤名	希釈倍率	使用回数	備考
サンヨール乳剤	500倍	8回以内	薬害注意、有機銅剤、部会リストにあがっていない
ストロビーフロアブル	2,000～3,000倍	3回以内	白さび病にも登録があるが、耐性菌に注意。
ダコニール1000	1,000倍	6回以内	耐性菌出にくい。
ベンレート水和剤	2,000～3,000倍	6回以内	

3) ハダニ類

梅雨明け後の乾燥する夏場に発生が多くなるので、梅雨の期間中に1回と梅雨明け前に1回散布すると効果がある。薬剤の連用によるダニ類の薬剤抵抗性を抑えるため、系統の異なる殺ダニ剤を使用し、生育密度が低い時点で殺卵効果のある薬剤を散布する。圃場周辺の除草を行い、圃場内への侵入と繁殖を抑制する。特に、本年はダニ類の発生が多く見られるため、下葉の裏に十分薬液がかかるよう、斜め上向きに噴口を向け散布する。

4) カスミカメムシ類

秋植えの6月咲きギク等の未収穫株が発生源となるので、圃場内に花を残さない。羽のない幼虫が多くを占めると思われる6月中下旬にローテーション防除を行う。特に蕾や花に成幼虫が集中するので、蕾や花がついたものは注意する。



写真6 カメムシ類と被害株

防除薬剤はスミチオン乳剤かダントツ水溶剤、スタークル顆粒水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤）がカメムシ類に登録がある。日中になると成虫の飛翔が活発となるため、早朝に防除を行う。

3 夏秋ギクの品質向上対策

1) 追 肥

止め肥の施用時期は開花時期から約 50 日前ぐらいであるので、施用後、梅雨時期の降雨が多い年では、生育後半に肥料が切れる場合がある。葉色が落ちた場合は、速効性の化成肥料を少量施用する。ただし、窒素肥料が効きすぎると白さび病が発生しやすくなるのでやりすぎない。

2) 下葉かき

薬剤散布しても地際部の葉裏には十分に薬液がかからない。さらに病害に侵されている場合は、感染源として残りやすい。風通しをよくして、ムレを防ぐとともに、病害の下葉からの伝染を防ぐため、全体長の 5 分の 1 程度の下葉を除去する。除去した葉は圃場に放置しないで、圃場の外へ搬出する。

ハモグリバエ類幼虫の食害痕が黄変している場合は、必ず葉をとりのぞき、圃場外で処理する。

3) 開花促進方法

ジベレリンの水溶液を散布することで、キクの開花が促進される。花首がのびやすい品種には用いない。登録された使用方法を守る。

剤 名	対 象 作 物	使 用 濃 度	使 用 時 期	使用方法及び注意事項
ジベレリン水溶剤 ジベレリン液剤	キ ク	25～ 100ppm	生 育 期	茎 葉 散 布 50 ～ 100 ℓ /10a、使用回数 2 回以内。

4 スイセンの管理

1) 促成栽培の球根管理

斑点病の発生がひどかった圃場の球根はなるべく用いないようにする。高温処理、くん煙処理後はできるだけ涼しい納屋等で保管する。乾腐病等の病害が発生している球根は適時取り除く。

2) 促成栽培の定植後の管理

発根と発芽を促すためスプリンクラーや灌水チューブ等による散水を行うとともに遮熱ネット等での減光、敷きわら設置で地温を極力低下させる。

3) スイセン葉先枯病がひどかった圃場では、太陽熱消毒を実施する。甚大な被害があった部分に透明マルチを被覆し、土等を掛けて密閉し、梅雨明け後から 1 か月程度行う。

5 ストックの播種と育苗

1) 播種

平坦地では 7 月下旬播種を目安に準備を進める。発芽適温は 20～25℃の涼温を好むため、酷暑期は発芽が悪くなる場合がある。特にアイアンシ리즈は発芽が悪くなる。

2) 播種用土

清潔で粒子の細かく揃ったものを準備し、覆土は発芽を揃えるため均一な厚さにする。用土中の肥料分を少なくすると、葉色が薄くなって、鑑別がしやすくなる。

3) 八重鑑別

八重率を高めるため、必要な苗数の 3 倍量程度の種子数を播種する。セル成型トレイに播種する場合、2～3 回鑑別する。第 1 回目は、播種 7～8 日後に発芽が遅れたラッパ型の奇形葉を抜く。2 回目は淡い葉色で子葉が長く、大きいものを残す。最後の 3 回目は生育不良株を除去する。

4) 播種後の管理

雨よけ下で行い、高温対策のためにハウスの外側に遮熱ネット等を張る。育苗箱はベンチ等の上に置き風通しを良くし、灌水は地温の低い早朝に行う。

5) ストックの苗立枯病と苗腐病

立枯れ性病害が発生した場合は、被害株を抜き取り、病原菌を調べる。苗立枯病（リゾクトニア菌）では、発病株を引っ張ると、地際からちぎれるが、苗腐病（ピシウム菌）の場合は、引っ張ってもちぎれずに根がついてくる。

6) 直播栽培

播種時の地表面の温度を極力下げるため、70～80%の遮光資材をハウスの外側にかけて、風通しを良くして地温の低下に努める。播種後は土を乾かさないように絶えず灌水する。徒長防止のため、発芽したら、遮光資材を5～7日以内に取り除く。

6 ハボタンの播種

1) 7月上中旬にセル成型トレイ 200 穴やペーパーポットを用いて播種する。高温期の播種では、遮光 30%程度で行うが、徒長しやすいため、かん水は必ず午前中に行い、遮光ネットをこまめに開閉する。

2) 切り花の場合、播種 14 日、本葉 2 枚程度の若苗で定植を行うと草丈が伸びる。

直播は、12～15cm ネットの枠に 2 粒落とす。

3) 鉢物ハボタンの場合、子葉展開後に、ビーナイン水溶剤 200 倍液(施設栽培のみ)を茎葉散布すると節間の伸長抑制ができる。

鉢物ハボタン

剤 名	対 象 作 物	使 用 濃 度	使 用 時 期	使用方法及び注意事項
ビーナイン水溶剤 80	鉢物ハボタン (施設栽培)	200～400 倍	子葉展開後	茎葉散布 50～150ℓ /10a、使用回数 2 回。